

【附属機関名称】会議概要

会議名	令和元年度 第1回介護予防・日常生活支援総合事業推進部会		
事務局	福祉部地域包括ケア推進課		
開催年月日	令和元年 9月20日(金)		
開催時間	午後 2時 00分 ~ 午後 3時 56分		
開催場所	ギャラクシティ		
出席者	諏訪 徹 委員	中村 輝夫 委員	結城 宣博 委員
	鶴沢 隆 委員	倉澤 知子 委員	大竹 吉男 委員
	中島 毅 委員		
欠席者	太田 貞司 委員	太田 重久 委員	
会議次第	別紙のとおり		
資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次第</li> <li>・資料1-1、1-2、1-3 情報提供資料</li> <li>・資料2 2020年度からの介護予防事業と生活支援体制整備事業について</li> <li>・資料3 地域支え合い推進員の役割(1層・2層)</li> <li>・資料4 国の動き</li> </ul>		
その他			

○事務局 本日はお忙しい中、ご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

本日の司会は地域包括ケア推進課の伝野が担当いたします。よろしくお願いいたします。

つきましては議事に入ります前に、部会員の異動等を地域包括ケア推進課の課長の千ヶ崎よりご説明いたします。

○千ヶ崎課長 皆様、改めましてこんにちは。お忙しいところをご出席いただきありがとうございます。

この部会については、昨年度休止してまして、1年ぶりに再開したものでございます。今年の部会は、この会議、介護予防・日常生活支援総合事業の部会、医療介護の連携の部会、認知症の部会、それから住まいの部会と4つあります。4つある部会の1つがきょうのこの会議でございます。

この4つというのは、先般、足立区でつくりました地域包括ケアシステムのビジョンの中の、特に重要な柱について、もう少し具体的な、せつかく知見を持った皆様方にお集まりいただいておりますので、少し小さな塊で、もっと具体的な議論ができないかということを諏訪会長からご提案をいただきまして、それを部会という形で実現したものでございます。

本来、部会をやるべきだったのですがけれども、去年は一年間、ビジョンをつくることに当たっていたということで休止しておりました。

今回、それが再開できたことを非常にうれしく思います。ありがとうございます。

そうした中、前回の推進会議の中で、事務局案として、その4つの部会のメンバーをお示しさせていただきました。

その後、私どもでもう一度、よくよく検討した結果、きょう、推進会議本体の委員である大竹様にこの部会にお越しいただくことにいたしました。これについては、本来の会議の中で、部会の中で検討する元気なうちの皆様方の活躍の場だとか、元気な期間を長く保つためにどういう仕組みが必要なのかという話を聞く上では、大竹様が所属しておられますボランティア協会、これはまさにその流れに合致する団体でございますので、大竹様に、ここに入っていたのが一番いいのではないかとということで、今回、無理を言って参加していただきました。

ですので、本来であれば推進会議本体でご承認をいただくことにはなるのですが、皆様方には本日ご承諾をいただいて、この後3回開かれる予定のこの部会に、毎回、大竹様に参加いただきたいと考えておりますので、よろしいでしょうか。皆様。

よろしいですか。ありがとうございます。それでは、そういった形で進めさせていただきたいと思います。

また、本日はこの部会を活動するに当たって、オブザーバーとして、きょうは鶴沢さんにお越しいただいております。

本当は、大竹さんからいべきでした。大竹さんに一言、自己紹介をしていただいた後に、鶴沢さんに自己紹介していただきます。よろしくお願いいたします。

○大竹委員 改めまして、こんにちは。

私、当初、住まい部会のところに配置をされたのですがけれども、会長からこっちへ入ってくれということで連絡をいただきまして、この部会に参加をさせていただくことになりました。足立区ボランティア連合会の大竹といいます。

あまり力になれるかどうかわからないの

ですけれども、頑張りたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○千ヶ崎課長 では、鶴沢さんお願ひします。  
○鶴沢委員 改めまして、足立区介護サービス事業者連絡協議会の中で、居宅介護支援部会の会のケアマネジャーの会の代表を務めております鶴沢と申します。よろしくお願ひします。

ここにございますとおり、私、医療・介護連携推進部会の委員なのですが、お話をいただいて、ケアマネジャーという仕事柄、ご高齢の方、それから要支援、要介護の方を中心にふだん接することが多いのですが、そこに至るまでのプロセス、あるいはその周辺のご家族であるとか、地域のニーズを肌身で感じているつもりでありますので、少しでもお力になればと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○千ヶ崎課長 ありがとうございます。また、本日、太田貞司副部長と太田重久委員のお2人は欠席となっておりますので、あらかじめご了解をいただきたいと思ひます。

どういたしますか、先生。1人ずつ、この間、自己紹介というか、推進会議の後に。

○諏訪会長 顔合わせはしているのですけどね。

○千ヶ崎課長 しています。

○諏訪会長 どっちでも。みんな知っている。

○中村委員 大体顔、知っています。

○諏訪会長 みんな知っていますよね、多分。

○千ヶ崎課長 わかりました。一番最初の発言の前に軽く、自己紹介して発言するというルールでやります。

このような会場で、会議、という感じになっていきますけれども、皆様のざっくばらんなご意見を聞くための会としてこの会議を進めてまいりたいと思ひますので、相手の立場を尊重しつつもざっくばらんな意見を頂戴

できればと思ひますので、どうぞよろしくお願ひします。

○事務局 ありがとうございます。

次に、本日の資料を確認させていただきます。

資料、事前にお送りしたもののほか、一部追加させていただいています。なお、追加資料は、一番後ろの資料4になります。

資料の確認をさせていただきます。まず次第、資料1-1「全世代が安心できる社会保障制度の構築に向けて」、1-2「社会保障改革の推進に向けて」、1-3「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施に関する有識者会議報告書」、資料2が「2020年度からの介護予防事業と生活支援体制整備事業について」、資料3「地域支え合い推進員の役割（1層・2層）」、資料4は「国の動き」です。

不足等ございませんでしょうか。ありがとうございます。

この会議は、足立区地域包括ケアシステム推進会議介護予防・日常生活支援総合事業推進部会設置要綱第6条により、委員の過半数の出席により成立いたします。現在、過半数に達しており、この会議が成立しますことをご報告いたします。

なお、この会議の会議録は公開することになっております。記録の関係上、ご発言の前にはお名前をお願ひいたします。

それでは、諏訪会長、開会のご挨拶をお願ひいたします。

○諏訪会長 よろしくお願ひします。介護予防と日常生活支援というのは、地域の役割がとても大きいですよね。ビジョンでも介護予防と日常生活支援などが一緒になっていて、その記述内容を見ると、やっぱり要支援になる手前のところで、一番書いてあることが大きいということなので。

まず、どうすれば出かける場所があつて、友だちがいて、やることのある地域をつくれるかということを考えるということ。それをここにいらっしゃる専門家の方々がどうサポートしたり、特に要支援ぐらいになると地域だけではなかなか難しいし、かといってサービスがそんなに豊富にあるわけではないので、そのあたりのことを一緒にどうやっていくかということを考えていくための場であるということ。

さらに、実際に地域に動きをつくり出していかなければいけないので、そのためにどういうふうにしていったらいいかという作戦会議みたいなことをしなければいけないと思っています。ざっくばらんにいろいろご意見をいただければと思いますので、よろしくをお願いします。

○事務局 ありがとうございます。

この介護予防・日常生活支援総合事業推進部会は前回平成29年1月の実施で久しぶりの開催ということで、会の目的、検討内容について、千ヶ崎より説明いたします。

○千ヶ崎課長 改めてこの会議で何をご検討いただきたいのかということについてです。

きょうの次第の中に、2の(4)番のところです。部会の検討予定内容ということで、令和元年度と令和2年度と書いてございます。

今年度、3回の開催を予定しています。この3回の中で、どこまで具体的に話ができるのかというのはございますけれども、まずは皆様方、先ほど諏訪会長がおっしゃったような地域をつくっていくために、今、何が足りないのか、どういったことが必要なのかということを出していただいて、それを今、区で考えていることはこういうことですよ。こういうことに対して、例えば意見をもらって

少しずつ微調整しながら、来年度の事業展開に結びつけていきたいと考えています。

そして、令和2年度につきましては、住民主体のサービス導入の方向性ということで、これも国が示している地域包括の仕組みの中の1つに、さまざまな住民主体のサービスという形が提案されてはいるのですが、足立区においては、まだまだ検討の余地というか、導入がまだ進んでいない部分がありますので、その辺の具体的話が、もし今年からできれば、それはありがたいのですけれども、一応令和2年度はその方向性ということで考えていきたいと考えております。

この後、資料で、今、国が地域の中で、そういった高齢者を見守っていく、支えていく仕組みというのをつくる上で、どういうことが重要なのかという大きな話をします。

そして、今、その中で、足立区では、こんな取り組みをやっていて、これからこういうことをやろうとしています、というご説明。

そして、住民主体による介護の場ということが具体的な話になってきますけれども、そのためにどういったことが必要かということを皆さんでしていただく。きょうはそういった流れになっております。

これを3回、今年度やっていただいて、推進会議、この間、行いました全体の会議の中で、この部会の中ではこういう意見が出ました、こういう方向性が打ち出されましたというような報告させていただきたいと考えております。

どうぞよろしくをお願いします。

○事務局 限られた時間ですので、審議に入らせていただきたいと思います。

議事の進行を諏訪会長にお願いしてもよろしいですか。

○諏訪会長 そういう感じですね。

○事務局 はい。

○諏訪会長 では、次第にそって、情報提供をお願いします。

○事務局 情報提供（１）「国の動き」ということで説明をさせていただきます。私、地域包括ケア推進課の伝野です。よろしく願います。

まず初めに、本日追加で配付しました資料４を初めに説明をさせていただきます。一番、後ろになります。この資料４は、資料１－１から１－３までの３つの資料のエッセンスとプラスアルファをしてまとめました。

まず国の動きを確認します。１は経済財政諮問会議よりということですが、１は財政面に主眼を置いて考えられたものです。

経済財政諮問会議とは、議長が安倍総理で、議論を踏まえて施策が動き、国の予算をどこに重点的に配分するかを決めます。健康で長生きし、働いてもらうことで税収をふやし、医療費、給付費を減らそうと考えています。

２０１９年４月から２０２２年３月を構造改革期間と設定しています。２０２０年度は団塊の世代が７５歳に入り始める時期なので、それまでに全世代が安心できる社会保障制度の構築に向けて、健康で長生きしてもらって、高齢者も長く就業できるようにすることで、給付と負担のバランスを見直していくことを進めていくとしています。

（１）持続可能な社会保障について。足立区は、就労では生活支援サポーターという新しい介護サービスの担い手を養成する研修を始めました。

また健康寿命の延伸では、介護予防事業の見直しを行っています。参考までに、お金の点で、足立区の介護保険給付費と後期高齢者保険給付費について、お伝えします。どちらも５年間で１．２倍と、２３．４％増加ということで、社会保障費が上がっています。

（２）予防・健康づくりの推進ですが、足

立区では、平均寿命や健康寿命が、東京都や全国平均値を下回っていたことから、平成２５年度から生活習慣病予防について、特定健診のデータを活用し、ハイリスク群に対する保健・栄養指導や未受診に対する受診勧奨の強化を行っています。

平成２９年には、第６回健康寿命伸ばそうアワード、厚生労働省健康局長優良賞自治体部門を受賞しました。糖尿病対策「あだちベジタベライフ」が高く評価されています。

（３）効率的な医療介護制度、地域医療構想等の実現。これについては、インセンティブとして医療費適正化に努力した自治体に交付金を増額、減額する制度、別名「保険者努力支援制度」があります。データを見える化し、市町村同士で、住民が健康に長生きできるように競って、住民が健康になることで、健康格差を縮小することを目指しているものもあります。

３番、高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施についてです。日本のこの医療保険制度は皆様もご存じのとおり、７４歳までは国保や社保ですけれども、７５歳に到達すると後期高齢者として、国民健康保険等から離れ、後期高齢者医療制度の被保険者に異動することになります。保健事業の実施主体も移ることになり、支援が切れるという面がありました。

一方で、高齢化に伴って、人工透析の開始年齢も高くなっているなど、生涯を通じた重症化予防はますます重要になっています。

参考までに。平成３０年度の足立区の人工透析新規導入の申請者は年齢別ですと５０から５９は４１名、６０から６９歳は５５名、７０から７９歳は９５名、８０歳以上は８４名と、高齢化しています。

その次のページに介護予防事業に必要なものとなっていますけれども、従来は運動と

言われていました。足立区でも運動を中心としたプログラムを実施していましたが、最近、運動、口腔栄養、社会参加の要素を取り入れた通いの場が必要と言われ始めました。

令和2年度からは、運動、口腔栄養、社会参加の要素や、低栄養等のフレイルを取り入れた介護予防事業を実施していく予定です。

国は高齢者の通いの場を中心とした介護予防、フレイル対策や生活習慣病等の疾病予防、重症化予防、就労・社会参加支援を市町村が一体的に実施する仕組みを検討する必要がありますと言っています。

医療・介護・保健のデータの一体的な分析、通いの場を活用した健康相談や受診勧奨の取り組みの促進等、医療専門職の配置を通いの場にしたいと言っています。

私たちがいる課は介護予防を進めているところになりますので、国が言っているように、今後は区役所の関係機関において、連携していくことが求められています。

国は、健康への無関心層の対策も言っています。無関心層も含め通いの場へ参加を促すために、今後はポイント等の個人のインセンティブの活用を促していくことも必要と考えており、当課でもインセンティブについては検討中です。

4の住民主体による通いの場に移ります。通いの場に求められるものを国はいくつか挙げています。取り組みの効果を高齢者自身が実感できるもの、高齢者が容易に通える場所にあること、週1回以上の頻度で継続させることが理想的。体操は健康になるツールの1つであることを挙げています。

通いの場は単に体操だけではなく、地域づくりへ発展するきっかけともなります。例えば、休んだ人の様子を見に行く、茶話会、食事会などで交流をするなど。さらには、多世代で保育園児などを招いて交流をするとか、

まちづくり、地域づくりに発展します。

取り組みによって、一緒に仲間がいて、さまざまな楽しみをつくり出し、自分自身も元気になる。こんなところで通いの場が必要ということです。

さらに、住民さんが集まることで、さまざまな情報が集まってきます。それが必要な支援にもつながります。

地域を変える起点は高齢者主体であり、通いの場とも言えます。通いの場が住民の元気度アップ、地域コミュニティの再生、保険料の上昇抑制にもつながっていくのです。

以上の話から、2020年度足立区で考える介護予防事業と通いの場について考えました。

資料2をごらんください。

表の左が介護予防事業で、右が通いの場です。介護予防事業から通いの場につなげていくという流れです。

地域包括支援センターで、高齢者人口の増、虐待通報などの困難ケースの増、介護予防チェックリストの結果による実態把握訪問で、機能強化を図っていただくということが、令和2年度から決まっております。

そこで、包括支援センターで行っている介護予防事業を事務軽減を図るため、外部化を図ることになりました。

それに伴い、介護予防の目指す形を見直すことにしました。増加する高齢者が、自身の健康状態、生活状況、価値観に合わせて介護予防の重要性を認識し、継続して取り組める仕組みを構築するとし、自分自身の健康の状態の見える化、介護予防の自主活動化、個人でも取り組める介護予防の知識、必要性の定着化を目指すものです。

外部委託に際しては、地域包括ケアシステムビジョンに示された、予防・生活支援の要素を盛り込み、4つの視点から再構築しまし

た。

1、これまで以上に運動、口腔・栄養、社会参加の3要素を重点的に取り入れる。

2、見える化の1つとして、自身の状態を把握できるように体力測定会を導入する。

3、自主的な活動を支援できる人材を養成する。

4、参加者が自主的な活動として継続していく必要性を啓発する内容にすると考えました。

先ほど、通いの場に触れましたが、介護予防事業から自主活動化につなげるのは容易ではありません。この後、基幹の結城課長から話があるのですが、第2層の生活支援コーディネーターの協力も考えています。

足立区が目指す通いの場は、運動を取り入れた自主グループの増加です。それは右の図になります。

足立区が目指す通いの場の定義としては、概ね5人以上、研修を受講した介護予防リーダーが属している、原則、月2回以上の活動がある、あだち・らくらく体操等、健康の運動を30分程度、取り入れることを考えています。

原則2回以上と書いてありますが、国が示したものは、週1回となっていましたので、週1回より緩くしています。その理由としては、足立区だと、都心ということで、活動できる場所の確保することがかなり難しいと考えているためです。

今後は、個人のインセンティブの活用が必要と考えていますので、それについては、現在、検討しているところです。

足立区は協働・協創を進めながら、健康づくり、地域づくりを進めていきたいと思っています。

以上です。

○諏訪会長 確認したいことはありますか。

もう1回確認したいのですが、この通いの場は委託でやるのですか。全部、委託でやるのですか。資料2の足立区が目指す通いの場の定義はいろいろあつたりして、委託をするみたいなことをおっしゃっていましたけれども。

○事務局 介護・予防事業は委託であつて、通いの場は自主的な住民主体の通いの場をつくっていく。そのための支援を包括支援センター2層に。

○諏訪会長 外部化予定するのは、介護予防事業の話ですね。

○事務局 はい。

○諏訪会長 通いの場は、生活支援体制整備でやるのですか。

○事務局 はい。

○諏訪会長 ということですね。

これ、何かお金が出るのですか。活動費か何か出るのですか。

○大竹委員 助成金とかそういうことですよ。

○結城課長 まだ検討中と言いましたけれども、図の真ん中にある「ふれあいサロン」というのが、自主化、住民主体のものとして活動しています。

○諏訪会長 もともと自主的なものですね。

○結城課長 現在サロンには、多少の会場助成費とか、開始時のお金とかは出しています。図の黒いところ、濃いところに行くとさらに体操等のやることのレベルが上がります。

○諏訪会長 つくりたいのは黒いところ。

○事務局 そうです。

○結城課長 それにわざわざ手を挙げるとすると、このふれあいサロンとかより、むしろもうちょっと助成金だったり、区の支援みたいのがないと、なかなか手を挙げてくれる方がいないのではないかと考えられます。

○諏訪会長 それをまさにこれから検討す

る。わかりました。

何かほかにありますか。今の説明で。

○中島委員 通いの場は誰がつくったのですか。

○諏訪会長 これからつくろうということですよ。

○中村委員 サロンをもっと増やそうというのでしょうか。

○諏訪会長 サロンは大体、月1回ぐらいじゃないですか。月1回ぐらいではなくて、週1、2回で、割と体操とかをやるような場所。これだったら、別にサロンではやりたいと言ったら。

○結城課長 今、サロンでも当然体操をたくさんしているところもあるのですが、何か所かは、お茶を飲みながら話しているだけというところもあるので、このようなところは体操を入れて、介護予防をしようというトーンではなくて、なるべく体操してくださいと言っていく、この図の黒いところです。

○中村委員 老人クラブ連合会の中村です。お年寄り、あんまり体操、体操というと来ないのですよ。そんなに大仰に考えることないのだよ。体操と云って、そんなにすごい体操があるわけじゃない。結城委員も知っているようにみんなのうちでやっているのは、はとぽっぽ体操、あの程度だったら結構参加してくれるけど、改めて体操というとなかなか来ない。

○諏訪会長 体操だけの場でやろうとすると、きついかもしれないね。

○中村委員 どうしてもそうになってしまう。だから、サロンの中に取り入れるとか、そういうふうになれば変わってきます。

それだとみんな参加しています。

○結城課長 中村会長のところのサロンが、まさにここに多分入る。

○中村委員 パークで筋トレなんて、ずっと

前から言っているけど、本当に好きな人しか行かない。普通の人には行かない。改めて、やられると行かないのです。

だから、私が一番いいのはそんなに大仰に考えないで、サロンの中に取り入れるというような形から入っていけば、少しずつ慣れていくのではないかなと思っているのです。

○諏訪会長 既存のものを上手に生かして、手を挙げてやりたいというのには、なるべく行けるように。

○中村委員 体操やりますからなんて言ったら、本当に好きな人しか来ません。

○諏訪会長 サロンが嫌いで、体操だけが好きな人がいてもいい。それはそれでいい。

○中村委員 そういう人は、住区とか包括支援の体操教室に行っています。

○倉澤委員 以前のらくらく教室で、すごくやっていた、当初、委託でやっていた体操教室、すごく人気があって、委託でやっていた。今の形が私はわからないのですけど。次の期を待つぐらい応募があってやっていたし、リピーターだと違う人が行けないから、新規ばかりをとってくださいますか。

あれ、一旦、あの大きさのものはやっていない。包括さんとかではやっていますけれども、事業所として委託を受けてやっていた部分は、今はないのですよね。

○結城課長 民間業者等に委託をして、3ヶ月1クールの教室は今もあります。

○倉澤委員 それは、この運動を取り入れた通いの場とは言われない感じ。

○結城課長 左側のほうのところですね。今、一番上のはじめての健康運動教室、旧はじめてのらくらく教室、これは引き続き継続されるみたいです。

○事務局 ただ、それは1回限りで卒業していただいて。



○倉澤委員 ですよ。1回、3カ月ですけどね。その人たちがどうするかという。

○結城課長 現在、包括で実施しているらしく教室というのがあります。それは包括がやっていて、そこは卒業という制度がないので、リピーターがかなりたまってしまうので、なかなか出ていけないということがもあるので、今回それを図の真ん中の外部化予定事業にして、なるべく自主化につながるように、卒業できるようなプログラムに変えるのを、委託をするというのを聞いています。

○大竹委員 これだと月2回とか、今、普通、サロン、月1回程度だと思うのです。それを月2回にするとかなり場所と人の手当てが難しくなってくるのではないかな。それをどうやってやるか。

体操ということは、うちの団体でも、学習会だとか、研修会があった最後には必ずあだち・らくらく体操をやっているのです。

当初はみんな体、動かさないのです。やっぱり回数を重ねていくうちに、みんなで「きょうはやらないのですか」と声かけもあるくらい。どこの場所でもそういうチャンスをつくってあげれば、広がっていくのかなという気がします。

○諏訪会長 いろいろな助成をやっている自治体があるので、研究したらいいと思います。よくいろいろなところに出てくるのは八王子とか、文京区とか。

結局、場所を借りるお金と若干の活動費と、あとは文京区も借りる場所がないから、有料のところが多いので。頻度を上げようと思ったら、その金、何とかしないと、多分上がらないと思う。

○大竹委員 今のサロンのボランティアの会費を払ってボランティアをしているという状況なのですよ。当然集まってくる人は、お茶だったりそれぞれ目的はありますけれ

ども。ボランティアも会費を払ってボランティアをする。それがいいのか悪いのか考える余地はあるような気がするのです。

○諏訪会長 ボランティアなものだから、お金をみんなで出すというのは、とても大事なことなので。それでやれる頻度といたら月1ぐらいがせいぜいなのですよ。それよりちょっと頻度、高いものをやってもらおうと思うと、ある程度お金が出ないと。都市部だとね。

その辺に空き地がいっぱいあって、青空でもいいというアプローチもあっていいとは思うのですよ。だから、公園でもいいし。別に場所を建物と考えなくてもいいのですけれども、とはいえ。

○結城課長 月1以上とかって結構ハードルが上がりますね。

○大竹委員 住区センターなんか、結構月間の予定表を見ると、空いている日にちは結構あるのですよね。ただ、同じようなことを違う曜日で、違う時間でやるということも必要。そのときに集まって来られる人というのは違うから、人によっては。

○諏訪会長 借りる場所はどのようなところですか。

○中村委員 場所がない。

○結城課長 住区センターみたいなものは結構多いのですけれども、大竹さんが言われたとおり、必ず水曜日にとれるというわけではないので。月ごとで予約するから、今回は月だったけど、来月は水曜日になってしまったみたいな感じで、ばらばらになってしまったりします。

なので、最近では、社会福祉施設等の、社会貢献ルームを貸して下さったりとか。

○諏訪会長 社会福祉法人と、企業はやっていないのですか。さいたま市は結構やってますよね。

○千ヶ崎課長 企業も少しずつ、開拓していかななくてはいけないなと思っていて。

○諏訪会長 サービス付き高齢者住宅とかね。サービス付き高齢者住宅も住んでいる人たちの要介護度が高くなっていたら大変だから、大体孤立しているから、本当は関心持っています。

○大竹委員 よくスーパーではそういうスペースをつくっているところがありますよね。ただ、それを定期的に使うとなるとどうなるかというのもあると思うのですけれども。

○諏訪会長 月1回はそこで、月1回は別の場所だって構わないので。

○大竹委員 そういうことですよ。

○諏訪会長 ほかの地域だと、この協議体に入ってもらおう、となったら、入ってもらったりするのです。というやり方も考えていったほうがいいです。

もうちょっとやわらかく、社協に委託してやったりしている地域が多いので、その辺の縛りがゆるい地域が多いのですけど。

○千ヶ崎課長 お金を出す。例えば、サークルとか、地域のサロンとかにお金を出すということになると難しいので、それにかわる何か仕組みをつくれなかなと考えていますけれども、先生、おっしゃるとおり、お金という面ですよ。

○諏訪会長 お金は本当に研究したらいいですよ。他の自治体がいろいろな取り組みをしています。

○結城課長 会場費が結構大変。

○大竹委員 私が関係しているところは、特養の1室を借りているのです。月に1回。そういう老人ホームなんかは結構そういうスペースがあるところがあるから、そういうところを借りるといいのかなと感じます。協力的な老人ホームもありますから。

○結城課長 社会貢献で、そういうのをやらなければいけなくなっていますから、受けはいいと思います。ただ、特養が今、26ヶ所ぐらいなのですよ。例えば先生が言ったサービス付き高齢者住宅は結構数があると思います。サービス付き高齢者住宅は、民間の有料老人ホームなのですが、そこもお昼とかは、皆さん部屋にいますので、食堂が空いていますので。

現在もサロンが10カ所もいかないと思いますが、結構借りているところがあります。大分使い勝手がいい。

○諏訪会長 それは連絡会みたいなのあるのですか。

○結城課長 サービス付高齢者住宅はちょっと分からないです。

○諏訪会長 あれは区の所管ではないのだよね。

○千ヶ崎課長 ないですね。

○諏訪会長 そうなのですね。

○千ヶ崎課長 担当の部署はあるはあるのですけれども、そういう各事務所さんみたいに集まっているという話は聞いてないです。

○諏訪会長 どうせ住宅の部会をつくるのだから、何か緩やかにネットワークを作ったらいいのではないですか。

○千ヶ崎課長 今までは、縦割りの話で申しわけないですけど、住宅のセクションがサービス付高齢者住宅の担当所管なのです。福祉ではなくて。入口は福祉なのですが、その後は住宅課のほう。

○諏訪会長 住宅課は何をやっているのですか。所管事項が特に区の権限でないでしょう。

○千ヶ崎課長 ないのですよ。

○諏訪会長 ないけど、一応係として名簿を把握ぐらいいはしているのですか。場所の、事業所の把握ぐらいいはしているのですか。

○千ヶ崎課長 正直、利用率とかそういうのもあまり把握できてない状態なのですよ。

○諏訪会長 どの区もそうで、苦労しているとは思いますが、担当があるだけ立派だと思います。

○千ヶ崎課長 先生のおっしゃるとおり、住まい部会も立ち上げましたので、実態とかも把握していかなければなとは思っています。

○鶴沢委員 向こう側にも十分メリットがある話だと思います。

○千ヶ崎課長 聞くところによると、6割ぐらい入居率。今、ちょっとどうだかわかりません。

○諏訪会長 大分いろいろできているから、最近、下がっているのではないですかね。

○千ヶ崎課長 もっと下がっているかもしれないですね。

○諏訪会長 埼玉では特養が空き始めているという、サ高住のお陰で。

○鶴沢委員 足立区は特にその建物系が、土地が安いと、ほかの区と比べて特徴があるのでしょうか。割と私も仕事柄、地域を回っていると、1ブロックに1棟ぐらいそういった施設があるぐらいの気が、足立区は特養も、サービス付高齢者住宅もあるなど思うので。歩いて通える範囲というのはとても大事だと思うので、それを活かせる道があるのではないかなと想像しています。

○諏訪会長 そういうものと、リーダー養成みたいなものは絡むのですかね。介護予防サポーターは、これまた全然別の話。

○千ヶ崎課長 そうですね。そういう事業所とはまた別の話で。これは区民の方に、65歳以上の方に介護予防チェックリストを送っていて、今まではハイリスクの人を拾いあげるツールとして使っていたのです。DASCとか入れて、認知症の方だとか、地域とつながっていない方、ハイリスクの方を拾いあ

げて、地域包括支援センターが訪問していた。

その項目の中に、地域で活躍したい、活動したいという意思があるのかという項目を入れて、そういった人たちにアプローチ、支える側に回ってもらえる高齢者を少し掘り起こしていこうということを考えております。

そういった人たちをつなげる場としてのこういう教室ですね。こういう養成、教室みたいなものを開こうと思っています。

○諏訪会長 何かわからないのですが、はじめてのらくらく教室に行った人たちは、要はお任せで場をつくってもらうところに参加したいという人たちなので、ほとんどリーダーにはならないと思うのですよね、多分。

だから、自主グループ化をするのだったら、リーダーになりたい人の養成からやらないと。セットでやったほうがいいと思うのですけれども。そういう事業はないの。

○結城課長 介護予防サポーター養成研修というのが、まさにリーダーだけを集めてやるものらしいです。リーダーというか体操を前でやれるような人だったり、少し指導できるような人たちのための養成研修。もう1つ、上のものとかは健康運動アップ教室ですね。

そっちは参加者の方々が「この会は自主化されるのだ」という意思を継ぎながら2カ月ぐらい教室に通って、いずれは自主グループ化する。それを始めから言っておくのです。

それとプラス、介護予防サポーター養成の研修の終了者とセットにできればよいというのが今の、足立区の考えだと思う。

○千ヶ崎課長 自主化からやる気のある人なんかがいれば、サポーター養成研修に行ってもらうことも可能ですし、そういうふうに関心を持っていく人をどんどん掘り起こしていきたい。最初から自主化だよと、おっしゃるとおり。そういった考え方をもっと押し出

していこうかなと思っています。いつまでもとどまってないでくださいね、ここにということになってしまいますけれども。

○諏訪会長 それは、社会教育とかの手法だとグループづくりとかをしながらやるわけじゃないですか。外部化する先はそういうことができるところなの。

○千ヶ崎課長 一応、そういうメニューはあるということなので。そこはほかの区でも実績はあるとっていたのだよね。そういうプログラムあるということなので。

○諏訪会長 自主グループの立ち上げはできるようなところ。

○千ヶ崎課長 養成研修まではあるけど。

○諏訪会長 お客様、お客様とやると大体ならないから、自主的には。

○結城課長 相当厳しいですね。

○中村委員 お客様は多いのです。

○諏訪会長 お客様、お客様とやるようなところに委託したら絶対に自主化にはならない。

○中村委員 先だってやろうなんて人はいない。

○鶴沢委員 包括さんで職員さんが、本当に顔のつながりが、地道に声かけて、押し出して何とか自主グループになっていただくというのが、これ外部になってしまうとどこまでできるのだろうか。

○千ヶ崎課長 そこでなのです。そこで、今度、地域包括支援センターに新たな役割を持っていただきたいという思いが、実は二の矢であって、そのところを説明してもらっていいですか。

○結城課長 少し説明させていただいて、レジュメで言うと3のところになるかと思うのですけれども。資料の3をご覧くださいと思います。

きょうは、千ヶ崎課長が言われたとおり、

地域支え合い推進員という言葉が少し飛び交っているので、その言語を共通認識できればと思ひまして、情報提供もかねてさせていただければと思っております。

では、資料3ですけれども、1ページの絵が2つありまして、下のほうをご覧ください。

まず総合事業の部会とかも含めまして、地域包括ケアの推進には、生活支援体制整備事業というものをやれとなっております。

難しく言うと、ポチが2つあるのですけれども、介護予防生活支援の基盤の整備をしないということが1つ。もう1つのポチが、高齢者が地域づくりを支える担い手となるように社会参加をする仕組みを構築するのが生活体制整備事業の柱になります。この2つです。

簡単に言いますと、行政として、生活支援体制整備事業をやるということは、まず1つは地域支え合い推進員を置く。それから、もう1つは、協議体を設置する。この2つを置くことによって、保険者として責務を果たしますということになります。

次のページをごらんいただきまして。では、支え合い推進員って何だということところです。支え合い推進員は、別名、生活支援コーディネーターと呼ばれておりまして、文のとおりではあるのですけれども、時間もないので、線のところだけ読みますと、生活支援・介護予防サービスの提供体制の構築に向けたコーディネート機能をやる。主にとということで、資源の開発とかネットワーク構築、これを主にやりますよということになります。

もうちょっと簡単に言うと、高齢者が活躍する場をつくろうと。そして、そこをどこかとつなげようということが、支え合い推進員でございます、と覚えてください。

もう1つ、協議体というもの。皆さん知っていましたか。この総合事業推進部会、協議

体とイコールなのです。第1層の協議体とイコールという形で、この部会が協議体として位置づけられています。

では、何をするかということで、下線を引いてあるところの「定期的な情報共有及び連携強化の場として、中核となるネットワークを『協議体』とする」ということで、こちらが第1層になります。

今後、第2層の協議体も包括レベルでつくっていきますよというのが、今、進められているものでございます。

次の3ページをご覧ください。支え合い推進員の協議体の役割はなんぞやというところ。主に6個ありまして、1つは、地域のニーズの資源の状況の見える化ということで、資源把握とか、資源マップやリスト化をすることです。

2つ目が、地縁組織等の多様な主体との協力依頼を下さいよと。

それから、三段目が、関係者のネットワーク化。1人でやってもしょうがないだろうということで、ネットワーク化。

四番目が、目指す地域の姿・方針の共有や意識統一。住民の方々にもそういうことをしっかり考えてもらおうということです。

五番目が、担い手の要請とかサービスの開発。

六番目に、ニーズとサービスのマッチングということ。

ちょっと難しいことになっていますけれども、具体的な動きは、下の図を見れば、3ページの図。どういうことかという。まず支え合い推進員が、地域の課題を把握したりとか、資源を把握して、この地域にはこういうものがあると。またはこういう課題があるぞというものを協議体に上げていきます。

協議体は、じゃあこういうことをしたいのではないかとか、こういうことをしなさい

いということを進捗員へ帰して、実際は資源を創出していく。そんなことをしていくのが、支え合い推進員の仕事になります。資源を開発する、また協議体に課題をあげる。地域を把握し、地域の対応はこんなことがまた起こったというのをキャッチボールして、この協議体の場が中心になって動いていくことになります。

4ページをご覧ください。実際に支え合い推進員の第1層、第2層といわれたものもありまして。第1層というのが、足立区全域をまたいでやるのが第1層です。

第2層というのが、日常生活圏域といって、わかりやすくいうと、地域包括支援センターは25カ所ありまして、25の包括に1人ずつ、一カ所ずつつけるのが第2層の推進員の配置という形になります。

第2層については、来年度から、令和2年から各包括に設置をしていく予定でございます。

第1層と第2層の違いということで行くと、4ページの下の方を見ていただきたいのですが、実は第1層、支え合い推進員というのは5名、社協についています。私もその1人ではあるのですが、まず上が第1層です。

これから先、来年度、第2層のコーディネーターが、それぞれの包括につき、包括は25カ所ありまして、5ブロックずつに分かれています。そのブロックの担当として第1層の中部担当、千住担当、東部担当、西部担当、北部担当という形について、第2層のコーディネーターをバックアップしていくという大きな役割を担っています。

もう1つ、違いがあるのが、第2層のコーディネーターは、この下の図に書いてあり、高齢者を中心として、なおかつ包括の担当エリアを動かしていく、そんな役割があ

ります。

第1層は、高齢者は当然のこと、それ以外も含めます。例えば子ども関連団体とかNPOとのネットワークとかもカバーします。

また第2層は、それぞれの担当エリアを持っていますが、それ以外やエリアを超えるところなど足立区全域を広くネットワークの構築するのが、第1層の役割であり、これが第1層と第2層の役割の違いになっております。

具体的に、5ページ以降については、参考事例ということで、昨年度行ったものを簡単に紹介させていただければと思っています。

これは千住地区です。4ページで言いますと、この下のところでいきます。2つ目のブロックのところ。千住ブロック。5個の包括があるのですけれども、ここの話になります。

5ページ、これは各地域包括支援センターが、男性の居場所をそれぞれつくっていきこうということで、取り組んだ事例です。

○結城課長 包括の地域ケア会議にて男性の居場所をつくりなさいということで、各包括、それぞれ男性の居場所を2年間でつくりました。千住なんかは9カ所ぐらいそれぞれの包括でつくったのです。

1回はつくったのだけれども、なかなか継続ができなかったりとか、どうやっていいのかわからないということがあったので、第1層が取りまとめさせていただいて、千住にある6カ所のところを一遍に交流会をしてみようではないかというのが、この例です。

次のページをごらんいただきまして。千住で言うと、男活新年会、交流会というのをやりまして、それぞれのサロンみたいなものが一度に集まりまして、何をお互いにやっているのかという情報交換ですとか、6ページの写真は、一緒にダーツ大会をやろうよという

ことで新年会を行いまして、大変盛り上がったと。

「あんなところのグループがある」「こんなことをしているのだ」ということでのモチベーションが上がったということでありまして、そんなところでこれからもやっぺいこう、または、これからも1つ、2つ一緒にやっぺいしようというものも生まれたりしまして、非常に効果があったと言われております。今後、こういったものを生み出していきこうというのが、千住のほうのものです。

6ページの下に成果とか書いてあるので、後ほどこれは見ていただければと思います。

もう1つ、7ページに行きまして、参考事例の2ということで、これについても東部地域包括エリアの地域ケア会議にて、男性の孤立死が結構多発したのです。そのときに、どうやってその孤立を防いでいきこうかといったときに、皆さんから声が上がって、この7ページに書いてあるとおり、包括だけではちょっと厳しい。または、サロンだけでは厳しいということで、ここに書いてあるとおり、他テーマのものも入れたと。例えば、NPO法人のほがらかネットワークさんですとか、子ども対応している綾瀬ネットワークだんさんですとか、スポーツクラブのASC Cさんですとか、さまざまところを入れて見本市を開設したと。

次の7ページ、8ページをごらんいただきまして。東部地域で、「人生ココから見本市」ということでやりまして、参加者が780名参加をいただきまして、出展団体が30団体。今まで包括、企業となかなか絡んでいなかったのですけれども、企業からの協賛なんかも得ながら、かなり盛り上がった。ボランティアも92名等々含めまして、一番下の写真見ていただければと思うのですが、8ページの下、見てください。写真を見ていただくと下

のほうは子どもたち。中段は中高年の方々、上は企業さんらということで、かなりのメンバーが集まってやった見本市という形になります。これもまさに、先ほど言ったように2層等含めまして、高齢者だけじゃないテーマとか、地域をまたいだところでの実施報告という形になっています。

この事例は、去年やったものですが、来年からはさらに各包括に第2層業務がついて、さまざまところでこういう活動がポコポコ生まれてきますので、1層はこれを束ねていき、また第1層と2層との連携が期待できるかなと思っています。

以上で、第1層と第2層の協議体の報告をさせていただきました。以上でございます。

○諏訪会長 質問はありますか。ないですか。さっきのお話の関連でも構いません。

○大竹委員 実は民間で同じような活動をしているところがある。男ボラ生き生き倶楽部というのがあります。これは10数年前に、団塊の世代が60で定年、そうすると必ず男性が引きこもりになる。こちらを表に出そうということで、NPO法人、ボランティアグループで、年1回、綾瀬でやっているもっと大規模なものを庁舎ホールでやったのです。

その流れが、それを10年ぐらいずっと続けている。何か自分で興味があるもの、特技があるもの、それを生かせる場所がここにありますよというのを紹介する場所です。それを10年間ぐらいやってきたものを今度は1回中止して、男ダンボラ生き生き倶楽部ということで、年何回かいろいろな行事をやって引きこもりになっている人たちを引き出そう。

なおかつ、そこでリーダーをつくっていくという形の。1つのグループではなくて、1つのことをやるのではなくて、いろいろなものを作って、いろいろな人を集めて、今回、

「人生ココから見本市」にも参加していますし、私もこの写真に写っています、ちっちゃく。

そういう形で同じように区内のいろいろな団体をコーディネートしていこうという形でやっているグループもあります。

○結城課長 男ボラ祭りというのは10年ぐらいずっとやっていたのですが、お祭りだけになってしまっているの少し閉じて、今はその方々が集まって再度また男ボラに。

○大竹委員 いろいろな講座をやるにしても講師になれるような人たちがいっぱいいるわけですよ、うちの団体は。

だから、いろいろな部門、例えば将棋をやったりとか、俳句をやったりとか、それからまち歩きをしたりとか、料理教室をしたりとか、そういう活動をして。何に興味があるのかわからないので、いろいろなことをやって、人を集めて、活動をして。

○諏訪会長 そういう方々は、どこで活動しているというか、身近な地域、小学校区だとか。それは人それぞれなのでしょうね。

○大竹委員 足立区内。人それぞれです。いろいろなところから要請があれば、講師として行くとか。

○諏訪会長 よく聞くのは、企業をやめてあまり地域につながってなかった人は、本当の身近な地域にはつながらないと聞くのですが、それはつながるのですか。

○大竹委員 意外とつながっている部分があります。でも、なかなか本当に1回やって1人捕まえられる範囲という範囲で。でも、結構若い人たち、50代の人たちもそのグループの役員になっているいろいろな活動を進めてくれています。

○結城課長 生み出さなくてもそういうのも結構あるのですよね。中村さんやっている、

老人クラブさんなんかもかなりやられていますから、どことくっついたりとか。

○諏訪会長 今あるものをくっつけて、人の交流とか行き来が生まれて、元気になるという手法ですよ。基本的には、全く新しいものをつくるというのではない。いいとは思いますが。

要するに、第2層に支え合い推進員ができますよという話。

○千ヶ崎課長 そうですね。

○諏訪会長 その人たちが自主活動の応援をしたいと言いたかった。

○千ヶ崎課長 もう1回整理しますと、さっき伝野から言ったように、運動・栄養・社会参加がこれからの介護予防には重要ですよということを国が言い出しています。これは前から言われていることですが、そのところにもうちょっとフォーカスした事業展開をしたいと考えている。

そうすると、社会参加というところでは、地域の中での活躍の場、今もあります。だけど、それだけでは足りないのでつくっていく動きもします。このつくっていくのに寄り添っていく第2層、さっき言った生活支援コーディネーターをつくります。

地域での活躍の場、活動の場という情報を地域包括支援センターの職員が持って、そして、地域の方を訪問したときに、こういう活動をやっているよということをお知らせして、なるべくマッチングというのですか、つなぎ合わせていくことをやっていきます。

そうすることによって、今まで体操だけで、しかも包括に来て、体操だけでリーダーシップとなっていた人たちをもっと違う形の、それこそ趣味の世界でもいいし、体操だけではない地域のグループにどんどんつなげていく。新しくつくったサロンとか、そういったものにつなげていく。そういったふうに少し

かじをきっていきたいということをお大きなところでは考えているということなのです。

というところで、皆様方から意見をいただきたいのは、その中で、さっき場所が足りないと、絶対的に足りないと言っていましたよね。こういうところがあるともっとよくなるのではないかという意見が、もしあれば。

あとは、ケアマネの立場としても地域のあれにつなげたりするということもあるので、すよね。

○鶴沢委員 そうですね。介護サービスだけではどうしてもニーズが賄いきれない部分がございます。要支援の方たちに対しては、介護サービスができる、そういったものがあれば、どんどんつなげていきたいなどは常日ごろ思います。

○千ヶ崎課長 例えば、そうするとケアマネの方にどういう情報の提供の仕方がいいのかとか、その辺の連携が地域包括ととれているのかとか、そういった課題というのが区として見えていなくて、そういったことを今、意見いただければありがたいなと思っています。

あとは、例えば、きょう、シルバー人材センターさんがいらしていますけれども、私はもうちょっと働きたいという人は、例えばシルバーに、それも支援の1つになると思うのです。だから、シルバーにつなげるということもこれからは積極的にできると思うのです。そういった訪問して、私はまだ働きたいという人をつなげるとか、そういったこともできるかなと考えています。

ただ、その情報が整理できていないというのが課題としてあって、地域包括支援センターに第2層を置くことによって、地域の中のそういう活動の場というのを、地域の中の場を包括支援センターがより今までよりも把握できるかなという期待は持っています。



ただ、うまくいくかどうかはわかりません。これはまだ、机上の話なので。実際、動いてみれば、いろいろな課題が出てくるし、いろいろな問題が出てくると思うのですけれども。ただ、方向性としてはそういう方向を打ち出したいと考えています。

○諏訪会長 第2層の話もここの場の当然、議論になるわけですね。

○千ヶ崎課長 そうです。

○諏訪会長 第2層の人たちがうまく動けるようにするような、基幹包括の役割かもしれない。結構ちゃんとサポートしないと、うまくいかない。

○結城課長 今、出たようにかなり包括センターでも業務が非常に多いです。

○諏訪会長 包括の仕事をやり過ぎるとできなくなるからやらないとすると、今度は孤立するし、サポートも受けられなくなるし。じゃあ、やるとなると、ただ埋没するだけになってしまう。なかなか難しい。

○結城課長 確かに難しいですね。

○諏訪会長 なかなか難しいと思うのです。かなりちゃんと頻回にサポートしないと、あとは、生活支援コーディネーターだよねという意識を持ってもらわないと。曖昧に誰が生活支援コーディネーターかわからなくて、みんなでやっていますというところは怪しいと思う。相当怪しくなる。

○結城課長 全員でシェアしていますというのはなかなか。

○諏訪会長 絶対に信用できない。

○結城課長 そのための第1層という形で、各センターの第2層の公平さをカバーさせていただいて、具体的に言えば2層同士で集まる会とかで、そんな形で情報共有していこうと思っています。

○鶴沢委員 今でも地域包括の職員さんが、地域のいろいろな団体さんとの関係づくり

をすごく取り組んでいらっしゃるなど感じますけど。

どうしても雇われている法人がありますから、その母体法人の理解がどこまでかというのが結構重要ななと思っていて。地域の関係づくりはものすごく地道な、お祭りに顔出すとか、それが勤務時間外だったらそれをどう扱うのだとか、その費用をどうするのだ、本当にそういう話になってくると、その職員さんのモチベーションがなかなか保てなかったりしますよね。この場で言うべき話ではないかもしれないですけど、そういった法人の理解が相当必要になると思います。

○結城課長 第2層を今回配置するに当たって、包括では大体1名、2名ぐらいの形の職員は少し増員がかかるイメージでいいですかね。

○千ヶ崎課長 そうですね。地域包括支援センターはそれぞれ圏域の広さも違えば、そこにいる高齢者の人口も差があります。ですので、来年度の委託契約を見直しているところです。高齢者の人口に応じて委託金額、要は人件費分ですよ。何人ぐらいここだと必要だろうというのに合わせた契約にこれから変えていこうかと思っています。

その中で、第2層の業務というのも吸収してくださいという説明をさせていただいたところでございます。

○結城課長 この仕事をするための1年ないし2年ぐらいのところは、少し生み出されていくということなので、そのための仕事としては、集中できるということにはなるのですよね。

○千ヶ崎課長 ちなみに各団体の方々が、新しい人が入ってくるきっかけはどんなことなのですかね。

○中村委員 個々にあたりたりしているのですよ。

○千ヶ崎課長 ということは、入ってくださいと。

○中村委員 言うのだけど、入ってくれないのですよ。

それで、募集のチラシもつくっているのだけど、せっかく現役時代のいろいろなノウハウがあるのだから、それを生かしてくれないと社会資源がもったいないという。

老人クラブは、高齢者を大事にしてくれる、取り上げているわけですよ。その割には老人クラブの認識が低いと感じがしないでもないのだけど。

そういう意味で必ず人と人がつながらないことにはどうにもならないから。ひとりじゃ生きられないのだから。ぜひ、現役時代のノウハウを活かして入ってくださいと言っても、どうも入ってくれないし、困っているのです。

○千ヶ崎課長 シルバー人材センターさんはどんな感じですか。

○中島委員 シルバーは、ここ2、3年前は社会貢献とか地域のために役立って、健康のために、が一番だった。近ごろは経済的理由とかがあります。入会動機を聞いた、統計とっているのですけれども。

世代の流れですか。定年が延びましたよね。それに伴って、シルバーに入ってくる人が少ない。職場もだんだんそういう人たちがいるので。今までは仕事、いろいろありますよ、皆さんお好きなどうぞ。家事援助であり、公共機関の何とかであったのですが、定年が延びたために、職業が少なくなったこと。そういうのが関係しているのですかね。昔は社会貢献とか地域社会だったのですけれども、今は経済的理由で入会しましたという方が多いです。

気持ちはあるのですよ。ボランティアとかで、住区センターの回りの草取りとか集まっ

てくださいと言ったら集まるのですが、ずっと聞いていけば、入会希望を聞いたらしい理由です。

○千ヶ崎課長 何か、事例はありますか。つながっていたシルバーさんに入っているうちは元気だけど、やめた途端に弱ってしまったという人とか。

○中島委員 そういうことはないのですけれども、やめた途端ではなくて、体がいうことをきかないからやめますという方はいらっしゃいます。

生きがいというかそういうのはあるのですけれども。ただ、体力がそれに伴ってこないからやめたということ。精神的に意志は強いですよ、高齢者の方。僕はそういう地域社会とつながっておきたいという気持ちは強いですが、ただ、体力が落ちてきたので。そういう方が多いです。

○千ヶ崎課長 ボランティア連合会さんはどうですか。

○大竹委員 ボランティアの高齢化ということで、世代交代がうまくできているグループもあるけど、それがうまくできなくて、会をやめます、会自体がなくなりますということもあるし、リーダーが活動できないからということで、つぶれなくても活動が低下していくみたいなどころがあります。

今のところ、ボランティア連合会とうまくやって、若いボランティアを育てて、既存のボランティアグループと新しくつくってそれを合体させていくとか、そういう努力もしているのですが、なかなかそれも難しいところがある。

○結城課長 シルバー人材センターさんのほうで経済的な理由で、とおっしゃられたけれども、週7日あって、大体どれぐらい、皆さん働かれています。

○中島委員 うち最高80時間までとな

ってしまして、だけど、家事援助サービスなんかは30時間です。

中には、歳が70、80近い方が清掃とか、トイレ回り、浴槽とか、清掃ですからね、家事援助サービスは、1、2時間でしょう。それを毎日ではないですから、週2日ぐらい来てくださいということですから。そういうのを積み重ねて、30時間は多いほうです。

○結城課長 恐らく週1日、2日ぐらい働いている方は結構多いのではないかなと思ひまして、その空き時間、そういうところで通いの場みたいなものだったり、ボランティアだったりとか、いろいろ手伝ってもらったりすると、すごくありがたいなと思ひまして。

今までは、シルバー人材センターさん仕事をしているからとつきづらかった感もあったのですけれども。そういったところでアプローチみたいなことも可能ですかね。

○中島委員 年齢的にあまり集うというのは好まないと思う。仕事が終わったら家に帰るよという感じ。仕事が終わってから、お茶しましょうかってまずないですね。ご高齢で、70、80だったら、家でおじいちゃんが待っているから、そういう感じです。

世代は、60ぐらいになったら、「おい、ちょっとどっかに行く」というのは聞いたことはありますけれども。

○大竹委員 そうですね、何人か私も知っている人がいます。週何日か働いて、空いている時間ボランティアやっている人。

○結城課長 そうですよ。ありがとうございます。今後、そんなことで連携がとれればと思ひまして。

○大竹委員 声かけは絶対に必要です。そういう人に来てもらうのは。

○諏訪会長 具体的に通いの場とかどうしていくかというのをきっと考えなければいけないですね。

○千ヶ崎課長 そうですね。3番のところで通いの場、居場所づくりの課題整理、優先順位ということで書いて、2番に生活支援コーディネーターに期待することは何かと書いてあるのですけれども、今のところ、いい意見交換と思ひています。

○大竹委員 場所について、空いているところを使うというのも1つのあれなのですけれども、例えば施設面で料理。男たちを引っ張り出すのに何が一番手っ取り早いかなということ、料理を食べに来てください。その中で、活動を広めようというのもあるのです。

そうすると、今、足立区内で料理をつくれる場所がどこにあるのか、ということなのですね。梅田とか、竹の塚、何か所かありますけれども。凝った料理をすると、それだけの火力が必要だし、水道が必要だし。そういう施設の整備も必要なのかなという気もするのです。あとは、例えば学校の家庭科室を借りられるとか、施設の調理場を借りられるということを考えてあります。

○鶴沢委員 学校はいい場所なのです。

○大竹委員 調理場は無理だとしても、家庭科室だったら使えるのかなという気がするのですよね。

ある中学校ではやっぱりサロンもやっていて、何年に1回かな、料理教室みたいなのが、女子が集まってそこで料理をつくってやっているのがあります。決してできないことではないのかなという気がするのです。

○千ヶ崎課長 会場とか場所の確保という意味では、さっき介護施設という意見がありましたけれども、倉澤さんの通所の施設なんかは空いていることはあるのですかね。

○倉澤委員 私も学校はすごくあるなと思ひています。例えば、体操と言ったら体育館が空いている土曜日もあるでしょうしと思ひましたし、それができるのだったら企業というこ

とであれば、毎日営業しているわけではないので、お休みの日だったら、いろいろ条件はお互いにあるとは思いますが。あるとは思いますが、そういうことだったら、手を挙げる、振ってみたら手を挙げる事業所はあるのではないかなと。そういうことでもしてみたいけど、どうしたらいいのだろうと思っているところは、法人としてもありと思うのです。ただ、手を挙げて聞きに行くかと言ったら、そういうことではないのが今だから、ちょっとそういう情報を流して、集めてみるのも1つかなと思う。

通所の事業所とか、特養とかの大きな施設ではない、通所をやっているところでもそういうことは可能かなと思います。フロアがあるので。

○結城課長 休みの日ということですね。

○中島委員 そうですね。

○結城課長 週1ぐらいは大体休みとってらっしゃるのですか。

○倉澤委員 土日休みというところも結構あって。本当に365日のところもあれば、週末は休みを必ずというところも。祝日を休みにするところもあるので、そうすると動きづらいことがあるのかもしれないですけど、そういうときだから出て行けるという人たちもいるのかな。

○千ヶ崎課長 会場を借りてそういった活動をするときに、必要な資源とか何か、場所だけではなくて、何か必要なものはありますか。

つまり、運営側からして、我々として何を用意すればいいのかというのがあって、単に場所を貸すだけでいいのか。例えば、管理する人が必要だとか、予約をする人が必要だという話になるのかなと思って。そこら辺どうですか。皆さん、どうやっているのですか。

○中村委員 何年か前に私、言ったことがあ

るのだけど、商店街の空き店舗を区で借りてくれないかと言ったことがある。そういうのを利用できればいいと思って。

それと、都住の集会場なんていうのはほとんど使っていない。ああいう空きがあるのだから、あれを何とか、区のほうで交渉して借りられるようなことになれば、場所としては結構ふえるのではないですか。

伊興地域だって、幾つも都住の団地があるけど、集会場はほとんど昼間は空いています。使っていないのはもったいないです。かなり広い場所があるのに。そういうところを何とか使用できるような手だてがあれば、これはいいですよ。

あとは、空き店舗を区で借り上げて、小規模の、お年寄りがいつでも買物した帰りにちょこっと寄って休めるような居場所をつくれなかと区に言ったことがあるのですよ。

○大竹委員 ぽつぽつとありますよね。千住だったら千住地区、あそこで休めるし。あと、八千代商店、梅田のところの、あそこにもあるよね。

○結城課長 ありますね。さっき中村さんがおっしゃった、都営の話、ちょっと近いのですけど。URさんは、そういうのはかなり積極的で、区役所の冠がついたりすると、無料で貸せるよなんて話も結構あって。西新井地区のURは意外とそういうふうに、介護予防教室とか、サロンでどうぞなんてことで開けていただいています。ちょっと、都営だといろいろ難しいところがありますね。

○中村委員 あその団地の中には、結構、お年寄りがいるのですよ、孤独な年寄りが。その人たちが遊びに来ればいいのだから、おりにきて。

○結城課長 一番近いです。

○中村委員 それができるし。運営が大変なら、自治会、老人会でもいいや、ボランティ

アの人たちと交代でやったら、そんなに頻繁に回らなくて当番できるでしょう。そういうような形をつくっていったらいいのかなと思っているのですけれどもね。

○諏訪会長 今回の部会はここで意見を聞いて、次回に何か案を出してくるという感じなのですか。

結局、必要なのはある種の資源で、場所と金と人で。リーダー養成のことで、助成金どうするのか、場所をどう確保するか。

ある程度、要素は出ました。

○千ヶ崎課長 はい。

○諏訪会長 だから、こうしたいという話を次にするとか。それをするにあたって、どういうふうに、URに話してみたとか。通所とか、サービス付き高齢者住宅に当たってみたの、という話があるのだったら、次にそれを議論すればいいという感じではありませんよね。

○千ヶ崎課長 そうですね。

○諏訪会長 そんな感じですか。

○千ヶ崎課長 できる範囲でやってみます。

○諏訪会長 それは、何か動くチームつくったほうがいいですよ。自分だけで頑張らないで。もちろんここにいる方、みんな頑張るけども。

○千ヶ崎課長 大丈夫です。

○諏訪会長 行政は動いてくれなければいけないけど、民間で動いてくれる人もちゃんと巻き込んでおかなくてはだめだと思いますから。

○千ヶ崎課長 そういうことですよ。

○諏訪会長 この場だけでは絶対動かなくて、結局、本当は通いの居場所づくり、さらにこの下にプロジェクトチームみたいなものができて、その人たちがしょっちゅう考えてぐらいにやっていかないと、この問題は動かないので。

そういう場をつくってくれるのは全然構わないので。

○結城課長 3の検討の2のところの生活支援コーディネーターに期待するということとかで、そういうような意見をいただいで。

○諏訪会長 まだいないから。

○結城課長 いないです。来週、再来週ぐらいに包括に向けて第2層の生活支援コーディネーター関連の研修がするものですから、皆さん、こういうことをリクエストあったよということを言いたいなど。まだやれというわけではないですけども。今、言ったように。

○諏訪会長 1の体制は1回終わらせていい。

そういう感じで、案をつくるなりのワーキングをもし、正式ではなくていいので、ちょっと考えていろいろな人の意見を聞いてやれば、話が動いていくようになると思うので。そんな感じで回してくれるのならいいと思います。

○千ヶ崎課長 具体的に、今、出た意見を形にできるかどうかのところまで、できる範囲でやってみます。

○諏訪会長 何回か集まるだけでも、話して全然動かないというか、実際、骨を拾って、汗をかく人がつくらないと、絶対に話は動かないので。

○千ヶ崎課長 わかりました。

○結城課長 キャッチボールをしながら進めていきたいですよ。こんなことやってみただけど、うまくいった、いかなかったとか。

○諏訪会長 もちろんこの方々とか、そうでない方とかで、そういうので知恵があるよと人がいれば入っていただいてもいい、全然構わないと思うのですけれども。

○千ヶ崎課長 わかりました。

○諏訪会長 そういうふうにもして、動かして。

○千ヶ崎課長 わかりました。

○諏訪会長 じゃあ、(2)の生活支援コーディネーターに期待をしてくれと、結城さんがおっしゃるので。

○結城課長 できるかできないか、少しあれですけど。

○諏訪会長 社協はサロンに助成金出しているのでしょうか。

○結城課長 出しているのです。出してやる場所もある。いいよと言っているところもあるので、それはサロンとして使わせてもらって、1回1,500円ぐらい払っているのですけれども、それすらも要綱がないから認められないとか、というところもあるのです。

○諏訪会長 ほかにやる場所を広げて、やってほしいと思うしかないですね。

○結城課長 会長がおっしゃったとおり、住民の方を中心にやると意外とすつとうまくいくので、その辺はやりようかな。

○諏訪会長 それだけでやろうとすると行き詰まるものね。

○結城課長 都住はたくさんあるので。特に足立区はたくさんあるので、使えるとすごくいい。

○諏訪会長 通いの場はそういう形と、生活支援コーディネーターですね。

○鶴沢委員 地域のニーズを丁寧に拾っていくことに。それは人間関係づくりなのだろうなという気がします。

さっき申し上げたように、報道の理解なんて問題がある中で、結構、ハードな仕事になるだろうなと想像するので。とはいっても初めて取り組むことなので、相当な熱意を持ってやらないと自分自身もつらくなってしまいます。私がもしそれだったら。エールを送りかえす。

○結城課長 エールを送られたということ。

○鶴沢委員 包括さん、法人含めての、理解とか体制みたいなもの、それを見て、そういった人間関係づくりを支援していただけるといいのかなと思っています。

○結城課長 法人の理解を得て、全体で取り組んでもらいたいと。ありがとうございます。

○諏訪会長 生活支援体制整備を始めたばかりのところで、必ずどの地域においても地域の資源発見。足立はもうやっているのですかね。

○結城課長 今、第1層である程度することはやらせていただいて、今後、できれば第2層にそのデータを渡して、調査みたいなものとか、実際に現場に行ってもらって、という風に考えています。

○諏訪会長 社会資源を知らないとしようがないから。そこから先がなかなか活動が進まないところが多い。

地域の元気な活動をしている人とつながってもらいたいので、地域のキーパーソンの人に会いに行くようなことをちゃんとやってほしいし、ぜひ紹介もしてもらって。

協議体が多分、地域ケア会議を通すのですが、地域ケア会議だけが協議体ではないからね。いろいろ集まる場に出かけていくのをみんな協議体にしてしまうという感じでやらないと地域ケア会議は、しょせん住民が主体的にならないみたい。

包括に呼ばれて来ているので、しようがないから行っているというような関係だから。

だから、地域ケア会議を使うというのは、主体的にならないので。ということは、主体的な場を外に求めないといけないと思います。

要は住民の集まりに呼ばれるぐらいの関係を持たないといけなくて、そういう住民の

集まりがあるところはどこかあるかを知らないといけないと思います。

埼玉だから人口規模、密度が違うのだけど、おもしろい活動をしている包括なんかは、自治会が助け合いの会をつくりたいから包括の職員に来てくれとあって、助言をして、自治会がいろいろな活動をやるというそういう動きですね。それ決して包括の地域ケア会議からやっているわけではないので、そういう動きができるようにしていかないと、多分あまり動かない。

○結城課長 そうですね。

○諏訪会長 地域ケア会議でやっていて、十分ですみたいな。そこで住民の人がなかなか主体的になってくれなくて、「なるわけないじゃん」と思っているのですけれども。

協議体イコール住民、地域ケア会議と思わないほうが絶対いいと思う。住民が「今度、自治会で考えたいから、助言に来てくれ」と言われるようにならないとしようがない。

○結城課長 それはいいですね。まずは資源把握の整理というところと、キーパーソンに会いにいける。

○諏訪会長 成功例を早く1個つくって。

○結城課長 自治会がやりたいというところにうまく連携とれるようになる。

○諏訪会長 こういうイベントでもいいし、何かしら地域と一緒に動いた連携をなるべく早めに経験してもらうようにサポートしたほうがいいです。

○結城課長 老人クラブだと、こういうことをしたいというような、皆さんで話し合う会はあるのですか。

○中村委員 ありますよ。きのうもブロックの会議がありまして、みんな会長さんを集めて、いろいろやったのですよ。

来月、芸能大会をやることにして、そうすると年に1回だから、一生懸命練習していた

踊りの人とか、カラオケの人とか、リズム体操とか、レクダンス、フラダンスのグループがみんな出てくるのです。そのプログラムを私、つくっているのです。それを10月20日にやるのです。

そういうときに「クラブに入ってなくてもいいから、見に来て、見に来て」と言って、それから誘ったりなんかしているのです。

あとはグラウンドゴルフだとか、そういうのもやっている。会員には、会員でなくても何か関心ある人だったら連れてきなさいと言っています。それで見てもらってやればいいのですよ。

見て、やってみたいと思ったら、入ってくれてもいいし。予選会でも何でもあるから参加してよということはあるのです。

あと輪投げだってあるし、雪の上でやるカーリング、あれを体育館でやるカローリングなんて今、やっているのです。講習会もやっているし、練習日も設けて誰が来てもいいですよでやっているのです。悠々館などを借りて。あれなら足が悪くても座って投げればいいのだし、あと輪投げもやっているし。この前、輪投げの大会をやったら100歳の選手が出てきましたから。ちゃんと投げているのだもの。だからそういうところに出てきて、一緒にやっているとなれば動くし、出てくるとい、これ自体が健康につながることでしょう。惜しくも2位になったから、その100歳の人が「俺がもう少し頑張れば優勝した」なんて、すごいなと思って。そうなってほしいなと思っているのです。100歳の時代。それをやるには集まる機会がないと。

○諏訪会長 いいと思います。

○結城課長 シルバー人材センターのほうで何かありませんか、コーディネーターに期待するようなことは。

○中島委員 シルバー人材センター、いつも

全体会でブロックに分かれて会議をやっている。そのときに、毎回あるのは接遇、お客さんに対しての傾聴。傾聴はちょっとレベルが高いということで、接遇ということで毎回やっています。

60～70代ですか、急に変わるものではないのですよ、やり方が。「おい、それじゃねえよ」は「それではごさいませんよ」と接遇では教えてもらっているのだけど、それもまた現実的ではない接遇というのがあるのです。

「私どもは」「私は」というところを「手前どもは」と教えるのです、先生が。どうもそれは、デパート、スーパーあのあたりの軽作業をしている言葉で言っているな。「持ち合わせておりませんのよ」とか言っているから、意味がないのだよね。またそれで反発するわけ、講習会では。だから、そうではなくて、現実の「それ何だよ、お前」じゃないけど、「あなた」とか、現実的な接遇とかスクールを受けたいという方がほとんどそうです。同じことを何回も聞いている。「何なんだ、これ」ということで。教えるほうも現実離れしたようなことをしないように、今はこういう時代だから、この時代に合った話し方とか、そういうのはちょっと思っています。

それと、シルバーで、そういう高齢な方が多いので、ケアマネの方とたまたまうちで一緒になったときに「ちょっとちょっと、それ触っちゃだめ」と言われた、おばあさんが今にも前のめりでつんのめりそうだったので、手をちょっと触ったら、「触らないで」と言われたって。「私はこの人が倒れたら大変なことになると思って握ったのよ」そのあたりの「資格を持っている人、持っていない人の差別だよ」と。「もう私、ああいうところに絶対行かない」という人もいらっしゃるの。そのあたりの対応もシルバーはちょっと

微妙かなと。

シルバー人材センターはそういう資格をとってから働いてもらうというのではないのです。今まで持っているスキルでもって働いてもらうですから。若い人たちのケアマネとか、ものすごくそういう目で見ると。気になるのかしりませんが、「触らないで」と言われた。「もう嫌だ。もうあそこには行かない。あの人が来るのだったら行かない」「ありがとうね」と言ってもらったら、もちろん認めると。あつちはプロだから、そうだけれども。何が何でも触るなどと言うと。そのあたりちょっと考えていただきたいのと、ケアマネジャー、このシステムの中でも。いろいろな人がいらっしやると。

シルバーそのものが今まで持ってきたスキルでもって働いてもらうのですよという方に、資格ないから触らないでという、ものすごく心が折れると言っていました。そのあたりのシルバーがどのあたりまでお手伝いできるかなと。

○諏訪会長 お互いの理解が進んでない。

○結城課長 シルバーさんはブロックに分かれていて、研修会をやられて180人くらい来るのですよね。

○中島委員 そうですね。

○結城課長 すごく高齢者の方がたくさんいらっしやって、元気な方もたくさん多くて、そういう意味では、包括とのつながりはあってもいいですよ。

○中島委員 よく講師に来てもらっているのですけど、ブロックごとのときには。

○結城課長 すごくいっぱいいらっしやる。180人くらい来る。すごいですね。ありがとうございます。

大竹委員、ありますか。

○大竹委員 障がい者から高齢者までいろいろな部門のボランティアが集まって、活動



している人たちはそれこそ生活支援コーディネーターになれる人かなと思っているし。常々いろいろな勉強をしていて、先月も千ヶ崎課長に来ていただいて、包括ケアシステムのビジョンの話をしていただいて、少しでも役立てられればいいなと思っています。

○結城課長 ありがとうございます。今後ともまた呼んでいただければと思います。お願いします。

○諏訪会長 なかなか難しいのですが、区もそうなのですが、生活支援体制事業で介護保険に基づいた事業なのだけで、高齢だけとしてしまうと住民はやる気にならないので、住民とやるときに、どこまでやっていいかというのを、これだけと思うと、すごく苦しくなるから。いろいろな区で、いろいろな自治体で、生活支援体制整備事業、高齢者の事業だから、例えば高齢者の生きがい活動で子ども食堂をみんなやりたいというから、子ども食堂をやりたいと言ったら子ども食堂はうちじゃないよと高齢の担当課が言ったとか、そういう話をたくさん聞くので、それは注意したほうがいいですよ。高齢者の生きがい活動につながるものは、子ども対象も含まれる。とにかく幅広く考えないと、規制してしまうととにかくだめですよ。そこは生活支援コーディネーターも包括の管理者も、よくわかっておいてもらったほうがいいと思います。

○結城課長 実際には高齢者の方々がいなくなることで、働けるところをつくれればいいから。

○諏訪会長 働いて元気になればいいので。

○結城課長 そういうことです。ありがとうございます。しっかり伝えます。

○諏訪会長 世代間交流とか、そのほうが楽しい。高齢者は。

○中村委員 結城課長も知っているけど、み

んなの家は小さい赤ちゃんから年寄りまで来ているのだ。最高齢は年齢差90何歳というのがありましたよ。みんな喜んでいますが、年寄りは来て。うちのやっているところの場所の問題は別として。そういうふうに集まれば。もう何年も前かな。幼稚園の先生と話したときにコラボできないかと、老人会と。その話をもう10年ぐらい前かな、持っていたことがあるのですよ。いいねと。その園長さんが「じゃあ、やろうか」といっていたときに、新しい園長さんになったらもう受け付けない。「うちは幼稚園で、子どもを育てるのが専門ですから」と言われてしまった。

大事なのだよ、子どもと触れ合うということは、いいことですよ。喜んでいるのだから。  
○大竹委員 児童館の子どもたちがお茶をいれます、きょうはお茶をいれる日ですから。利用者のお年寄りを呼んでお茶をふるまっていました。そういう関係というのは必要になってくる。

○諏訪会長 一方で、区は区で進んでいますと言わなければいけないから、わけわからないことばかり言われても困ってしまう。

ただ、苦しくなってきましたよね、コーディネーターが。どこまでやっていいか。なるべくいろいろな人を巻き込んで、その人にやってもらうようにしないと苦しくなる。

○倉澤委員 もういろいろ活動はされていて、そこをつなげていくということとかをすると、何か1つもうでき上がるのではないかなとちょっと思うのと、今の保育園は結構積極的で、例えば保育園の園長さんとお話しする機会があるとか。うちはデイサービスなのですが、保育園児が月1で来てくれるという約束を取りつけていて、介護給付の利用者さんたちですけど、それはそれで大変喜ぶし、子どもたちもなかなかお家には高齢の方とかいない家がふえているので、それはそ

れでおじいちゃん、おばあちゃんに抱きしめられたとかいっているの、声かけるとそういうところも絶対に参加、子どもたちと保育園のお遊戯会でみんなで行って、私たちも歌を歌おうとか、一緒に踊ろうということもやっていると。そこのつながりを。

○結城課長 入らせてもらう。

○中島委員 どっかが1人でやろうと思うとそれは難しいから、こういう方たちが聞いてあげるとスムーズに行くのではないかな。大変だと思います。

○結城課長 ありがとうございます。

○鶴沢委員 先ほど申し上げたことと、高齢者、ニーズを持っている側からの視点だけではなくて、意外と、私も一般企業の人間ですから、企業側から見たときに、どういった接点か、もしかしたら私たちみたいな福祉とプレの人間、包括の感覚ではなく、本当に一般企業の。例えば、わかりやすいところだと、商店かもしれないけど、企業側から、高齢者のシルバーさんのビジネス的な観点で、見本市がいい例かもしれませんけれども、こんな接点を持ちたがっている、そんなニーズがあったのかということを見ることができるかもしれないという可能性があると思う。発想を転換するような気持ちで、一般企業にも目を向けながら飛び込んでいっていただければ、おもしろいかなと思います。楽しんでいただけるといいのかなと。

○結城課長 一般企業の方も求めていますものね。今までは包括がその辺断っていたのですが、大分広がってきていいかなと。

ありがとうございます。

○諏訪会長 ありがとうございます。大体いろいろな議論をしたと思いますけれども、何か全体を通して、お伝えすることはありますか。

今回は、通いの場では、もう少し具体的な

話を検討することと、生活支援コーディネーターも同様に主要な話題として出るのでですか。

今年何をやらなければいけないかという目標を決めたほうがいいと思います。

○結城課長 来年度に向けて準備するものとかを少しラインアップしてもらって、皆さんからご意見をいただきたいですね。

○千ヶ崎課長 そうですね。

○諏訪会長 やらなければいけないことが、いっぱいありすぎるので、絞りながらやる。焦点はある程度、おきながらやったほうがいいと思うのですけれども。

散々いろいろなところで出ていた梅田地区のモデル事業、みたいなことに結局、地域を動くように促していかなければいけない。

○千ヶ崎課長 そうですね。

○諏訪会長 梅田モデル事業をどう他の地域に活かしていくか。それが、本当は住民がつくる協議体の話とか、その話になってくるのですけれども。

全面的にいろいろやらなくてもいいのですけれども。結局、ああいうものが動いていくということを目指さなければいけないので、通いの場とかだけではなく。

○千ヶ崎課長 そこは梅田地区でモデル事業をやっている、その地域の方たちに集まってもらっている。

○中村委員 もう動いているわけですか。

○千ヶ崎課長 動いているのですね。さっき言った、小学生に認知症サポーター養成講座を受けさせたりだとか、そういうのもやるのです、そのモデル事業の中で。

見ていると、やはり地域包括支援センターにかかる負担が大きいなというのが、見えてきているところなのです。

確かに、やっていることはいいことが多いのですけれども、最終的には人手なのですよ

ね。そこをいかに分散して、いろいろな人を巻き込んでいって、進めていけるのかというのが、これが課題というか、見えてきたところなのかなと、私は個人的に思っているのです。

やはり、マンパワーは必要なのです。そこをどうやってつくり上げていくかというのが課題です。

先生がおっしゃるように、協議体というか、議論する場というのをちゃんとこっちがさあ来てくださりだけじゃなくて、自然と集まっていけるような、そういう本当の会議体というのがどうやったらできるのかなと、我々頭を悩ませているところなのです。

その会議体をほかの地域にもつくってきたいなという思いはあるのですが、さっきの会長のご意見を聞いて、呼んでいるうちは人ごとのままなのかなというのは、なるほどなと思ったところなのですね。そのところは工夫しないといけないかなと思っています。

○諏訪会長 さっきの助成金みたいなやつで、地域でやりたいという人が、もし組織があるのだったら、そこでやれるようにお金出したっていいのですけれども。やりたいのだから自分たちで協議するでしょう。それでいいと思うのよ。そこに入っていけばいい。

○中村委員 このブロックが分かれています。老人クラブもこのブロックになっているのですよね。だから、その辺のところも声かけていただいて。

○千ヶ崎課長 ありがとうございます。

○中村委員 利用して。利用すると言ったら怒られてしまうけれども、せっかくのブロックがあるし。保健所もたしかこういうブロックですよね。自主グループがいっぱいあるのだから、その辺ともコラボできるようなことになると、広がっていくかなと思っ

ただね。

○千ヶ崎課長 ありがとうございます。

○諏訪会長 全体としてこんな感じできょうはよろしいですかね。

○千ヶ崎課長 そうですね。これをどう整理して次回につなげるのかといのは。きょう、非常にたくさん宿題をいただいておりますので、持ち帰ってみんなで知恵を絞りたいと思います。

○事務局 次回の日程については一旦こちらで調整させていただきます。

本日はお忙しいところご出席いただきまして、ありがとうございます。

以上で、本日の推進部会は終了となります。